



根を張ってこそ花が咲く

小美玉市文化ホール
ポジットバックは

小美玉市の文化ホール3館を拠点に、まち全体の元気をどんなふうにつくっていくか。そして10年後へ向けていかに伸ばしていくか。それを考えたのが「小美玉市まるごと文化ホール計画」です。

3館は現在、住民と行政が互いに知恵を絞り、汗を流しながら、館の元気づくりを行なっています。それが関わっている人たちの誇りにもつながっており、理想的なまちづくりのスタイルになっています。新たな文化づくりの物語を描いていくこの計画は、そんな3館で活躍する住民リーダー12名と館職員7名がプロジェクトチームを組んで、3館揃ってつくる、初めての取り組みなのです。

まずはじめに、3館がそれぞれの個性・独自性を互いに認め合い、刺激し合う存在になることを大事にする、ということ計画の根底にしました。そして、これまでのまちづくりは問題発見・問題解決でしたが、これからは良いところを磨きこんで伸ばしていく『ポジティブ・フィードバック(※)』の精神

が大切だということ掲げ、小美玉3館の良いところ(強み)は何なのか、2年間の活動の中で探し続けることにしました。

2年間の活動を通じて辿り着いたビジョン「根を張ってこそ花が咲く」。切り花はすぐ枯れてしまうのと同様に、出来合いの作品を持つてくだけの文化活動はすぐ枯れてしまいます。都市ならば頻繁に生け換えるのでいいかもしれませんが、地域は毎年美しい花を咲かせる木々に囲まれていたい。人の根を張れば、まのちの幹が伸び、文化の花が咲く、そんな文化活動にしていきたいことが「持続可能な豊かな文化のまち」の実現につながると考えています。

※ポジティブ・フィードバック
褒めあつたり評価しあつたりして相互に元気を分け合い、自分を高めようとする感性的方法。良いところを磨きこんで伸ばしていく。
対義語→ネガティブ・フィードバック
「問題発見(悪口や不満の言い合い) ↓問題解決(解決行動)」の理性的方法。



策定プロジェクト2年目の初回は7月7日七夕の日。県央地域一斉ライトアップと重なったため、みのり風の広場で星を見ながら文化談義。忘れられない1日となりました。



蓮見 孝

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクト コーディネーター

1948年神奈川県鎌倉市生まれ。64才。1971年東京教育大学教育学部芸術学科工芸・工業デザイン専攻を卒業。20年間にわたり日産自動車株式会社勤務し、第1モデル課長、エクステリアデザインスタジオ代表チーフデザイナー等を歴任。プレセア、ラルゴなど多くの車種の開発に携わる。1976年に大学院大学であるロイヤルカレッジ・オブ・アート(ロンドン)に社命留学。1991年に筑波大学に専任講師として転籍し、2000年から教授(大学院人間総合科学研究科芸術専攻)。芸術専門学群副学群長、大学本部の広報戦略室長、学長補佐などを歴任。茨城県総合計画審議委員会副会長、茨城県生涯学習審議会・社会教育委員会会長、国交省観光まちづくり事業(常陸太田地区)座長・コーディネーターなど、茨城県および県内の市町村を中心に、さまざまな地域振興プロジェクトにかかわっている。また日本デザイン学会理事・副会長、(独)大学評価・学位授与機構・大学機関別認証評価委員会専門委員・学位審査会専門委員、グッドデザイン賞審査委員、JR東海デザイン委員、(財)日本サイクリング協会評議員など、多角的な活動をおこなっている。2012年4月より札幌市立大学理事長・学長に就任。「地域再生プロデュースー参画型デザインングの実践と効果」「ポスト「熱い社会」をめざすユニバーサルデザインーモノ・コト・まちづくり」、「マルゲリータ女王のピッツァーかたちの発想論」など著書多数。

人を何よりも大切にする文化

長くて覚えにくいのですが、この事業は、「小美玉市まるごと文化ホール計画策定プロジェクト」といいます。平成22年11月18日の第1回から今年の9月8日までの2年間にわたり、市内3館のホールを支えてきた住民リーダー12名と職員7名が参加して、活発な議論や研修が、夜な夜な熱心に繰り広げられました。

そもそも“まるごと文化ホール計画”とは何なのでしょう。インターネットで検索してみると、“市内にある3つの公共ホールが、文化の創造・育成を図る地域住民の拠点として機能し、それぞれの特性を活かしつつ連携するための指針となる全体計画の草案をつくる”と記されています。

わたしは、そのアドバイザーとして参加することになったのですが、いずれのメンバーも文化の担い手として活発かつ着実に文化活動を推進されてきた方々でしたので、“わからんチン”は一人もいず、ゴールめざして最良のチームワークでサクサクと指標づくりに邁進することができ、とても印象的なプロジェクトとなりました。メンバーのみなさん、そして名仕切り役の中本正樹さん、本当にありがとうございます。

結果として、文化の本質に迫る有意義な成果が得られたと思います。文化とは、あらゆる人をその人らしく生きさせてくれる表現の泉であり、幸せの源泉なのです。だからこそ、文化は人を何よりも大切にします。文化ホールは、人を育て、人に生きがいを与えてくれます。ホールで生きがいを育てた人は、やがてまちの隅々に魅力的な文化活動の花を咲かせ、それが町中に広がって、市内がまるごと文化ホールになっていくことなのでしょう。いくら立派なホールがあっても、切り花のような興業活動に頼るだけでは、すぐに文化の花はやせ細ってしまうはず。「住民参画」という根のある活動が引き継がれていくからこそ、文化の木は大きく枝葉を広げ、ますます見事な花を咲かせるのです。「根を張ってこそ花が咲く」という山口茂徳館長の名言を忘れないようにしたいものです。

今回のプロジェクトには、さまざまな方々にゲストとして来ていただき、意義ある情報交換や議論をすることができました。喜多方プラザ元館長の薄崇雄さん、TAP事務局長の羽原康恵さん、茨城県生活文化課の武田順さん、市空港対策課の高田勝利さん、東京芸大音楽学部教授の熊倉純子さん、群馬交響楽団の五十嵐靖夫さん、栗田弘之さんです。みなさんの活動の様子や文化に寄せる思い、アドバイスを通して、小美玉市の文化ホールのあり方を多様な角度から比較して見ることができ、より客観的に自分たちのあるべき姿をとらえることができたと思います。遠路を厭わずやってきてくれた文化の友に、心から感謝いたします。

「桃杏不言 下自成蹊」という司馬遷の名言があります。桃やアンズは何も言わないけれど、その美しさに惹かれて人びとが訪れ、その木の下には自然に道ができる、という意味です。今回のプロジェクトを通して、メンバーのみなさんが、しっかりと根を張った桃やアンズの木に見えてきました。まるごと文化ホールは、きっとこれからも多くの文化の友だちを惹き寄せ、文化の道を大きく広げていくことなのでしょう。



まるごと文化ホール計画のツリー構造

ビジョン

根を張ってこそ花が咲く

～小美玉文化はポジティブ・フィードバック～

戦略

極める

～住民参画のクオリティ～

つなげる

～バトンタッチ～

広げる

～文化のネットワーク～

手法

参加のしやすさ

住民主役行政支援

次世代へつなげる

館職員の育成

アウトリーチ

横の連携

まえがき

東日本大震災の中で

この計画づくりの最中に起きた東日本大震災。文化ホールの存在意義を強く考えさせられた出来事でした。

平成23年3月11日、午後2時46分。マグニチュード9.0の大地震、津波、原発事故が一日のうちに起こった未曾有の危機。小美玉の文化ホール3館は、震災後すぐに住民の避難所や災害対策本部となりました。

そんな中、天井が落ちたホールを見にやってくる我が子のように心を痛めて一日も早い傷の回復を心待ちにしている人、震災の影響で一度は中止になった参加型事業の振替公演を希望の光にしていると涙ながらに語る人、仲間たちにメールで連絡を取り合い励ましあう人など、文化ホールの活動がライフスタイルと一体化し、強く生き抜こうとする姿を目にしました。

1. ココロ・オープン・サポート

そんな中、いち早く動き出したのが、みの〜れ住民劇団「演劇ファミリーMyu」でした。自らの存在を社会的機関として認識する彼らは、阪神淡路大震災の折に演劇の手法を用いて被災者の心のケアを行なっていた演劇人たちの活動を学んでおり、演劇の持つ効用を認識して常日頃から活動にその手法を取り入れ、技術を磨いていました。

自ら持ち得る技術と経験を全う地域に役に立てるため、地域の小学生たちの心のケアを目的とした演劇ワークショップ「はっぴい☆ぷるじえくと〜ココロ・オープン・サポート〜」を企画。地元アーティストも賛同し、絵本とジャズピアノのコラボレーション作品も取り入れた独自の企画を瞬く間に創り上げて実践しました。地域に根ざす文化ホール「みの〜れ」専属の住民劇団として、オリジナル作品を創り続けてきたことで磨かれた人材と経験があつてこそ為せる技でした。



みの〜れ住民劇団「演劇ファミリーMyu(みゆう)」が開催した「はっぴい☆ぷるじえくと〜ココロ・オープン・サポート〜」は、
①演劇的手法のワークショップ②ミュージカルワークショップ
③ジャズピアノと絵本の朗読のコラボ作品の3本立て企画。
地域の小学生を対象に行われた。



コスモスやしみじみの家、民家園まで含めたエリア一帯をフィールドに活性化を図るコスモスプロジェクトが企画するC.C.C(にすもす・きんぱす・こんさあ〜ど)。

2. 資源をつなげる

同じ頃、コスモスプロジェクトも動いていました。前述のMyuに属するミュージシャン2名を招聘してローコンサートを企画。関係者はコンサートの開催のみならず、人々の交流と新たな価値を生み出すことに着眼。出演者でみのもれとつながり、コーヒーサービズでNPOしみじみの村とつながり、終了後は隣接するしみじみの家で宿泊前提の打ち上げを行うことで、コスモスが有する資源を「つなげ」、住民主体の活動による「人の心の温もり」が感じられるような企画を生み出しました。

3. ピンチはチャンス

アピオスでは、「アピオス小劇場タンゴコンサート」が、大ホールが地震の影響を受け使用できなくなっていたことで開催が危ぶまれていました。しかし関係者は、飲食できる小ホールに場所を移し、団子を食べながらタンゴを聴くという「タンゴでタンゴ」なる企画にバージョンアップさせました。暗い世相をもろともせず、洒落でピンチをチャンスに変えるたくましさや柔軟な発想力が発揮されたケースでした。

文化がまちを元気にする

小美玉市には、小川文化センター(アピオス)、四季文化館(みの〜れ)、生涯学習センター(コスモス)の3館の公共ホールがあります。人口が約53,000人の小美玉市に公共ホールが3館あるという文化的に恵まれた環境です。合併以前の3町村がそれぞれに公共ホールを所持していたことによるものですが、3町村の住民がそれぞれに文化意識の高い人たちであったためであると思われます。この恵まれた財産を有効に活用して「まちじゅうに文化があふれる」ようにしたい、そして「文化のまち小美玉市のイメージが全国に知られる」ようにしたいと考えます。

第二次世界大戦後の日本は、産業経済が急速に成長しました。「心のやすらぎ」を忘れて「物の豊かさ」を求めて邁進しました。それなりに「まちが元気」になりましたが、「真の元気」ではなかったように思われます。文化に親しむことによって私達の「心にやすらぎ」が生まれます。また、世代を超えたつながりも生まれます。そして「創造力が豊か」になって産業経済が活性化し「まちが元気」になっていきます。「物の豊かさ」と「心のやすらぎ」の両方がある、初めて真に「まちが元気」になるのではないのでしょうか。

四季文化館(みの〜れ)で始まった「住民参加・参画、行政支援による公共ホールの運営」が、またたく間に小川文化センター(アピオス)にも生涯学習センター(コスモス)にも根付き、活発に活動を続けています。文化の力を使って「まちを元気」にするためには、この活動をさらに活性化することが必要であり、この活動が世代を超えて継続できる仕組みづくりを行うことが必要であると考えます。3館の個性を活かしながら、ある時は融合し、またある時は競い合い、3館を文化発信の拠点として活用して「文化のまち小美玉市」を構築していくためには、どうしたら良いか？ 3館で活躍する住民リーダー12名に、コーディネータとして筑波大学大学院教授の蓮見孝先生をお迎えし「小美玉市まるごと文化ホール計画」を纏めました。

この計画を使い込み、住民一人ひとりが芸術を愛し、みんなで文化を育てる気持ちが世代を超えて若者へと受け継がれていくことを望みます。



黒田惇彦

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム リーダー

小美玉市羽鳥在住。
みの〜れでは“光と風のステージCue”住民プロデューサー、アピオスは愛称選考委員会委員として名付け親の一人、コスモスはクラシックギターのサークル“ギターフレンズ”のメンバーとして定期利用するなど、小美玉市文化ホール3館を愛する地域人。
小美玉市公共ホール運営委員会委員長。
四季文化館企画実行委員会副委員長。

文化が無いとなぜダメなのか

理性と感性

「文化がないとなぜダメなのか」という問いが投げかけられることがあります。「人間らしく生きていくために本質的に求めるものが文化だ」ということは言い続けてきましたが、もともと多くの人に「なるほど！」と思ってもらえるよう、私たちの言葉を紡ぎだそうと「まるごと文化ホール計画策定プロ

ジェクト」を通じて勉強してきました。その中のひとつに、本計画コーディネーターである筑波大学大学院教授蓮見孝先生から教えていただいたことがあります。

「私たちは物事を判断し実践するために理性(ロゴス：真面目な自分)という知恵を活用しているが、その対極に

ある感性(パドス：お茶目な自分)という知力も存在し、一人の人間はこの両輪があつてこそ調和を保ち、共存しつつせめぎあいながら魅力的な個性を創り出している。学校教育を通して理性を高める訓練をしてきているが、感性を高める社会的機能は、残念ながら今の社会にはない。これを活発に高めていき、社会の調和を図ることが、文化ホールが果たしていく使命なのではないか。

理性的方法は「問題発見(悪口や不満の言い合い)↓問題解決(解決行動)」というネガティブ・フィードバックの暗い側面を持っています。それに対し、褒めあつたり評価しあつたりして相互に元気を分け合い、自分を高めようとするのが、感性的なポジティブ・フィードバック的マネジメントです。

感性を高める社会的機能である文化ホールが、まちの活性化を担う原動力となる存在なのだということを私たちは学びました。

子育ては親育て、 ホール育ては地域育て

みのくれ・アピオス前芸術監督の能祖将夫さんが常々言われていたことです。

「文化ホールは言わば地域の子ども。実際の子育てと同じように、育てるのに手間と暇と金がかかるし、多くの人の関わりが必要で、苦勞も多いが喜びもまたひとしおだ。地域がそのような子どもを持ち育てていること自体が、地域の、そして地域を形成する個々人の成長と誇りになる。子どもを育てることは親を育てることだと言うように、文化ホールを育てながら親である住民一人ひとりが育てていく。そういう機能が地域の文化ホールにはある」。

文化ホールにできるだけ多くの人が知恵を絞り、汗を流せば流すほど、社会もそれだけ成熟していきます。私たちはこれからも絶えずできるだけ多くの「育ての親」を増やす努力を続け、3館を大きくたくましく育てていきたいと思います。それがきつと、地域社会を大きくたくましく育てることにつながっていくでしょうから。



プロの演奏家や、文化ホールを拠点に活動する住民劇団や楽団などが地域へ出向いて積極的に交流を図っているとする「地域アクティビティ」。全120行政区への訪問を計画している。
演奏家：津軽三味線ユニット「あんみ通」



本田仁子

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム サブリーダー

与えられる喜びより与える喜びを

「どうせ私たちには関係ない、一部の人が楽しんでやっ
てるんじゃない…」

とと思っている人を、「文化ホールの活動に参加してみようかしら」と変化させるかが一番の課題だと思えます。

それには地道な声かけが有効ではないかと最近感じています。ボランティアスタッフに参加しませんか？と職場の人に声をかけ、「慣れないもぎりでしたが楽しかったです」との声を聞くと、こちら嬉しくなります。職場以外での付き合いが出来るときかけでもあります。催し物に参加している喜び、協力して成功させた充実感を共有することが次の声かけにつながるのではないかと思います。お祭りも見ているより参加している方が楽しいですから、企画する方はもっと楽しいでしょう。とにかく文化ホールに足を運んでもらうことです。

足を運んでもらうためには、幅広い年齢層の人に向けた催し物を仕掛けていく事です。幸運にも私どもの保育園児は1歳児からアピオスのステージに立っています。歌ったり、演技をしたり、実に堂々と発表します。自分を見てもらう喜び、スポットライトをあびた興奮を経験しています。父兄も同様です、ステージに立つ自分の子どもにカメラ、ビデオを向け晴れ舞臺に満足しています。文化ホールのステージが近くに感じていることがよく分かります。

小学生、中学生に成長していく子どもたちが、ステージに立ち自分を表現できるチャンス、生演奏のオーケストラのステージを聴く体験、アクティビティの出前授業による邦楽体験。このような本物の芸術に触れる機会を提供すること、すなわち情操教育をするための投資は、未来への希望につながります。これからも惜しまず継続していかなければなりません。

このような豊かな経験をした子どもたちが、成人して次世代の担い手として活躍することが理想です。若いエネルギーを存分に使えるような文化ホールにしていけたら、と日々考えています。練習、発表の場所として使いやすく、若者たちが集う場所づくりのホールにしていけたらよいと考えています。具体的な案は、これからみんなで考えていきたいです。

与えられた喜びより、与える喜びのほうが大きいと感じられますように。

日本が生き残るための戦略

計画策定プロジェクト座談会のゲストにお越しいただいた群馬交響楽団五十嵐常務理事は、『価格競争では海外に全く歯が立たない現在の世の中で日本が生き残っていくためには、時代の変化に対応しつつ新たな価値を次々に生み出していける「創造的な人間」で勝負するしかない。そのためには、今の子どもたちに想像力と創造力をつけさせる戦略として文化芸術が大切だ』と言います。

片山善博さん(元総務大臣・元鳥取県知事)が、全国公立文化施設協会主催の「アートマネジメントセミナー」で次のように講演しています。

『文化芸術、特に芸術は無から非常

に高い価値を創造する営み。現代の経営危機の時代においては、前例やマニュアルが何も無いところからどうやって難局を切り開いたらよいかという考えの力、先を見通した上で新しく成し遂げる力、挑戦する勇氣を持つて新しい考え方を生み出していくことが重要。地域社会全体が文化芸術を重視して、文化芸術に親しんでそこからクリエイティブに挑戦する、勇氣ある社会にしなければならぬ。(中略)知に基づく地域づくりを標榜し、実践しなくてはならないと考えるが、そのためには地域に根ざした生活を守るため、地域に誇りと自信がないといけない。それを生み出すのは文化

芸術でしかあり得ない』
明治維新、戦後復興と並び、社会が大きく急速に変化していると言われる現在。マニュアルや常識が通用しない社会に加えて少子高齢の波。いまの子どものためにこれからの生きていくために私たちにできることは、精神的にたくましく賢く育つ環境をいかにつくるかという事。そのための文化芸術であり、社会的機関としての文化ホールなのです。

学び舎

第二次世界大戦後、経済的な豊かさを求め、物にあふれる豊かな社会を構築しました。しかし、「物の豊かさの時代から心の豊かさの時代へ」と言われるように、いま必要とされているのは「人の役に立つ」「人と人をつなぐ」ことで得られる心の充実感です。文化ホールは、住民一人ひとりの心の充実感を達成できる「学び舎」としての機能をもっともっと高めていくことが求められる時代なのではないでしょうか。